

國學院大學學術情報リポジトリ

國學院大學図書館蔵「伊勢物語(武田本)」の本文

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-13 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 笹川, 勲 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00002358

國學院大學図書館蔵『伊勢物語（武田本）』の本文

笹川 勲

はじめに

國學院大學図書館には、貴重書として『伊勢物語』の写本が十点所蔵されている（平成二十一年十二月十日現在、完本のみ）。本稿で採りあげる『伊勢物語』（貴一九二三）はそのうちのひとつで、デジタルライブラリーにおいても公開されている写本である。『伊勢物語』の伝本のうち、藤原定家が校訂、書写したとされる写本は大きく根源本と天福本、武田本の三系統に分類されている。該本はそのうち武田本の本奥書を有する写本である。これらは、いずれも定家の校訂、書写にかかる写本である。しかし、その伝本数は、「天福本二十本に一本位の割合にしか存在していないようである」と⁽¹⁾とされている。後述するように、武田本は定家が家の証本として整定した経緯もあり、本来であればより重んぜられるべき伝本といえる。本稿では、該本の本文を検討し、武田本系統の『伊勢物語』伝本における位置づけを試みたい。

一 國學院大學図書館蔵『伊勢物語』の書誌

はじめに該本の書誌を掲げる。表紙は青色地寿の字宝尽文様の緞子で、縦二五・二纏、横十七・二纏。綴葉装五折。墨付七七丁。表紙の中央に「伊勢物語」と記した、空色地に金彩で梅花を描いた題簽が貼られている。見返には、金切箔や金砂子を散らし、金彩で雲形や小松を描いた美麗な本である。保存状態も良好。本文は一面八行書。字数は大凡二二字から二三字。和歌は二行分かち書きで、「万葉」、「古今」といった集付が付されている。章段冒頭には朱の合点、本文には天福本との校異が、朱で施されている。本学図書館デジタルライブラリーの表示によれば室町時代後期の写とされるが、極札や書写奥書がないため、書写年代の判定はなお慎重であるべきと思われる。さて、該本には次のような本奥書が存する。

合多本所用捨也可備証本

近代以狩使事為端之本出来末代之人今案

也更不可用

此物語古人之説不同或称在中将之自書或称

伊勢之筆作就彼此有書落事等上古之人

強不可尋其作者只可翫詞華言葉而已

戸部尚書

最後の「戸部尚書」とは、藤原定家を指す。定家が戸部尚書、即ち民部卿に在職したのは、建保六年七月九日から

嘉禄三年十月廿一日までの九年間⁽²⁾であるから、その間に書写された本文であることがわかる。「合多本所用捨也」以下、該本と同じ本奥書を有する『伊勢物語』の伝本は、定家本の伊勢物語の中でも特に「武田本」と呼ばれている。該本も、本奥書に拠るならばその一本といえる。

二 『伊勢物語』の伝本系統

本節では、『伊勢物語』の伝本系統を概観する。『伊勢物語』の伝本に関する言及は、既に院政期からあった。例えば、奥書に、「写本云／以頭照（昭）阿闍梨并皇太后宮越後本所書寫云々」とある、伝為氏筆本『伊勢物語』（国立歴史民俗博物館蔵⁽³⁾）には、

① 或本 此物語ハ心とめてみすはこきあちはひいてこしとそふるき人ハいひける

頭輔卿本にて所書写也件本ハ大外記師安本也小式部内侍自筆之由所注也雖然不審事件本ニ令書付也和歌二百五首其後以或証本令比較テ又一本校了件両本次第無相違ニ宮御本云々仍付其等也自此下物語ハ他本令有事等を追書入也 皇太后宮越後本云々

（二一九～二二〇頁）

② 或本奥書云

此の本ハ朱雀院のぬりこめにかやかミにかきてありしをてつからときゝしかハかきうつしたる高二位の家注にも高二位のつけたるなるへしとて本ニとあれとまたかの業平みつからのとしてかきける本ハことにそあるをかきそへたりまたみあれのないしかゝきたるもありおほろけならぬ本とあり

或本云

此朱雀院のぬりこめにかやかミにかきてありけるをてつからときゝしかハかきうつしたるとかうの二位のかくはかきたる此本ハかうの二位のいゑのとそきゝはへるとそ

(二六八〜二七〇頁)

③ 私云此物語諸本不同員数不定次第相違其中特違両本也

一樣ハ初春日野若紫哥終昨日今日とはおもはさりしを云々

奥書朱雀院本と注ハ大概様此本也

一樣ハ初君やこしの哥終ニ忘なよほとは雲居ニの哥也

此本ハ小式部内侍自筆之由大外記師安語侍之本也伊勢物語号依斎宮事初學その哥尤可然云々但不可然歟又件本ハ世不晋歟可秘藏云々

(二七〇〜二七二頁)

とある。①からは、「大外記師安」から「藤原顕輔」のもとに伝わった「小式部内侍自筆」の『伊勢物語』、および顕輔本に対して、顕昭が校合として用いた「三宮御本」、「皇太后宮越後本」といった『伊勢物語』が当時、存在していたことが明らかになる。また、②からは「業平みつからの」としてかきける「本、つまり業平自筆の『伊勢物語』や「みあれの内侍」が書いたとされる『伊勢物語』があったことが認められる。③からは当時既に『伊勢物語』の章段構成によって大別される二つの系統が並び立っていたことがわかる。一つは現行の『伊勢物語』に見られる「春日野の」歌にはじまり、「つひに行く道」の段に終わる「朱雀院本」の系統。今ひとつは「狩使本」と呼ばれる、「君やこし」の歌にはじまり、「忘るなよ」の歌に終わる「小式部内侍自筆本」の系統である。

鎌倉時代に入ると、藤原定家の書写になる、定家本『伊勢物語』が出現する。定家はその生涯に幾度となく『伊勢物語』の書写を行っているが、その諸本は池田亀鑑氏や山田清市氏の研究によって、大きく①根源本、②天福本、③武田本の三つに大別されている。根源本は「抑伊勢物語根源、古人説々不同」に始まる、漢文の長い識語を有して

いるため、根源本と称される。かつては「流布本」と称されていた本文である。『伊勢物語』は、室町時代以降、当代随一の文化人であった三条西実隆や、実隆に『伊勢物語』の講釈を行った連歌師宗祇の権威も相俟って、天福本の本文が広く普及し、いわゆる「流布本」の位置を占めた。このため山田清市氏によって、その奥書から、「流布本」にかわって「根源本」の名称を設定された伝本群である。

天福本は、その奥書に、

天福二年正月廿日己未 申刻凌桑門

之盲目連日風雪之中遂此書写

為授鍾愛之孫女也

同廿二日校了

とある写本である。⁽⁴⁾ 原本は後花園院が三条西実連に賜った後、その死に際して宮道親元に譲られ、その没後実隆のもとにわたったことが知られている。その後、該本は、元禄十五年四月六日に、当時の所蔵者であった柳沢吉保邸の火災によって焼失したとされる。しかし、学習院大学蔵の三条西実隆筆本や、宮内庁書陵部蔵の伝冷泉為和筆本といった転写本の存在により、その本文を再建することが可能とされる。⁽⁵⁾

一方、武田本は、若狭の守護大名であった武田家に伝来したためその名をもつ。細川幽斎の『伊勢物語闕疑抄』によれば、若狭武田家に入る以前は、後土御門院の御物であった。後奈良院の時代に能登の守護大名畠山家に賜り、以後、朝倉孝景、若狭武田家、三好長慶、細川幽斎などを経て、徳川家康の許に入り、以後の消息は不明とされている。⁽⁶⁾ 武田本の奥書は、先にも掲げたが、後掲する静嘉堂文庫本で示すと、

合多本所用捨也可備証本

近代以狩使事為端之本出来末代

之人今案也更不可用

此物語古人之說不同或称在中将之自書

或称伊勢之筆作就彼此有書落事等

上古之人強不可尋其作者只可翫詞

華言葉而已

戸部尚書

とある。池田龜鑑氏は、武田本の奥書から

書寫の場所は判然としないが、その目的は證本に備へんがためであつた事は、奥書によつて理解される。そして此處に言ふ多本なる本が、如何なる系統の本であつたかは、到底伺ひ知る事の出来ないことである。ただ此の奥書の所記を信用するならば、定家はこの書寫本に於て、一種の定本を完成しようとい圖したらしいことのみが感じられる。

と、武田本が定家が書寫した『伊勢物語』の中でも、格別重要な地位を占める写本であることを示唆している。山田清市氏も武田本奥書の冒頭に、「合多本所用捨也可備証本」とあることから、「定家証本としての位置を、武田本に与えている」と述べている。また、山田氏は、流布本の位置を占めてきた天福本が、その奥書に、「凌桑門之盲目連日風雪之中遂此書寫授鍾愛之孫女也」と記していることを、「その書寫意図は明らかであり、不自由な視力を凌いで書寫したのも、孫女に残すためであつた」と指摘し、「伊勢物語に定家本本文を基準とする場合、天福本に優位して、武田本本文にこそ、その拠るべき地位が与えられてしかるべきであろう」と、定家本『伊勢物語』の伝本において、武田

本こそが、証本として中心に据えられるべき本文であることを強く主張している。

國學院大學所蔵の伊勢物語の一本として、この武田本奥書をもつ写本が蔵されていることは、注目される。デジタルライブラリーにおいても公開されているが、解説等はまだ付されていない。

三 國學院大學図書館蔵『伊勢物語』の本文質 — 静嘉堂文庫本との対校から —

本節では、國學院大學図書館蔵の武田本『伊勢物語』が、武田本系統の中で、どのような位置を占めうるのかを確認する。山田清市氏によれば、現存する武田本系統の『伊勢物語』で、最善本と目されるのは、静嘉堂文庫本である。該本は、既に山田氏によって翻刻され、古典文庫に収められている。まず、静嘉堂文庫本の書誌を、古典文庫の解題によって掲げると、

縦二十二・七糎、横十五糎、淡き水色無地の表紙を用い、中央に「伊勢物語」と題簽を有し、薄手、鳥の子の料紙をもって、本文一面八行乃至九行に書写し、和歌一字下げの二行書き、一行平均二十字詰、墨付本文総数八十二枚、本文は白紙一枚おいて、二枚目裏より書初め、末尾に武田本奥書、その一枚更に奥に、

以定家卿自筆不替一字書写之 御判

と記すが、「御判」の字は明らかに墨色を異にした別筆である。

とある。更に、

さて、奥に白紙一枚を付すが、本文の終りと、武田本奥書との間に、「根源本第二系統」の「抑伊勢物語根源」云々の奥書を転載している。しかして、この「抑伊勢物語根源」云々の奥書は、後の補写添付にかゝるものたる

ことは、その一枚だけ紙質を異にし、且又、糊で貼付していることによつても歴然である。としてゐる。國學院大學所蔵本は、武田本奥書以外の「定家卿自筆」云々の識語や「根源本第二系統」の奥書は備えてゐない。

次に、具体的な本文の様態について確認する。静嘉堂文庫本は、前述の通り、武田本系統の伊勢物語伝本中、最善本の位置を占めるとされている。しかし、写本の常として、誤写等を免れることはできない。山田清市氏は武田本の諸伝本を校合し、「武田本規定本文」を提示してゐる。⁽¹¹⁾ 武田本系統の諸伝本は、規定本文と照らすことによつて、武田本本文としての純度を測定できるというわけである。全四七箇所の武田本規定本文と、國學院大學本、静嘉堂文庫本との対校は、本稿末に別表として付した。参照いただければ幸いである。さて、武田本規定本文と國學院大學本、静嘉堂文庫本の異同は次のようになる。⁽¹²⁾

章段	武田本規定本文	國學院大學本	静嘉堂文庫本
9	わかおもふ人はありやなしやとと くりはらのあねはの松の	わか思ふ人はありやなしやとと くりはらのあねはの松の	わかおもふ人はありやなしやとと くりはらのあねはの松の
14	あつまりきゐてありければ	あつまりゐてありければ	あつまりゐてありければ
58	いとかなしきこと	いとかなしき事	いとかなしきこと
81	いたしきのしたに	たいしきのしたに	たいしきのしたに
90	けふこそかくもにほふらめ	けふこそかくもにほふとも	けふこそかくもにほふらめ
115	おきのゐみやこしま	おきのゐて宮こしま	おきのゐて宮こしま

まず、武田本規定本文に対して、國學院大學本と静嘉堂文庫本は、互いに近似した本文を有すると言える。國學院大學本と静嘉堂文庫本が相違する箇所は、第九段と第九〇段のみである。第九段は、國學院大學本が武田本規定本文を有していることが注目される。一方、第九〇段は、國學院本が天福本の本文と一致する箇所である。また、第十四段は國學院大學本、静嘉堂文庫本ともに、「くりはらのあれはの松」となっているものの、國學院本は「ね」字を傍記している。山田清市氏は静嘉堂文庫蔵本の本文について、「伝常縁筆本を凌駕する純度の高いもので、又定家自筆本の再建を可能ならしめた貴重な存在である¹³⁾」と高く評価されている。ここに、國學院大學本の本文を突き合わせてみると、漢字か仮名かという表記の問題は措くとして、静嘉堂文庫本との一致度は極めて高い。また、第十四段については、傍記でももとは、静嘉堂文庫本と同じ本文を訂正しており、國學院大學本の書写者が、何らかの形で静嘉堂文庫本とは異なる本文をも披見したことがわかる。また、静嘉堂文庫本は第一―四段に、「すりかりきぬすりかりきぬの」と語句の重複があり、ミセケチが施されている。いつぼう、國學院大學本は「すりかりきぬの」とあって、静嘉堂文庫本における重複箇所は写されていない。このことは、國學院大學本が、静嘉堂文庫本の転写本ではない可能性を強く意識させるものといえよう。

以上の点から、國學院大學蔵の武田本『伊勢物語』は、静嘉堂文庫本に近似する武田本本文を有することがうかがえよう。

むすび

國學院大學図書館蔵の武田本『伊勢物語』について、武田本『伊勢物語』の伝本中、最もすぐれたものとされる静

嘉堂文庫本との対校を通して、本文質の検討を加えてきた。その結果として、國學院大學図書館蔵の武田本『伊勢物語』は、静嘉堂文庫本に近似した武田本文を有していると言いうる伝本であることが判明した。今回は、あくまで静嘉堂文庫本、それも本文に限って、翻刻本文によって対校した結果である。今後は、國學院大學本と静嘉堂文庫本との勘物注記の対照や、披見可能な武田本『伊勢物語』との比較検討を通して、國學院大學蔵武田本『伊勢物語』の性格をより精確に見極めていきたい。

注

- (1) 山田清市氏「伊勢物語武田本の性格と伝本」(『伊勢物語の成立と伝本の研究』一五七頁 桜楓社 昭和四七年)。
- (2) 『公卿補任』によれば、建保六年に「伊予権守。治部卿。七月九日遷民部卿」とあり、嘉禄三年には「十月廿一日。罷民部卿」とある。
- (3) 伝為氏筆本『伊勢物語』の本文は、国立歴史民俗博物館館蔵史料編集会編『物語』(貴重典籍叢書文学篇第十六卷 臨川書店 平成十一年)に拠る。
- (4) 学習院大学蔵二条西実隆筆『伊勢物語』の奥書本文は、小林茂美氏校注『伊勢物語』(影印校注古典叢書 新典社 昭和五〇年)に拠る。
- (5) 天福本の伝来は、池田亀鑑氏『伊勢物語に就きての研究 研究篇』(有精堂出版 昭和三五年再刊)を参照した。
- (6) 武田本の伝来は、池田亀鑑氏注(5) 前掲書を参照した。
- (7) 池田亀鑑氏注(5) 前掲書二四七頁。
- (8) 山田清市氏注(1) 前掲書一五六頁。
- (9) 山田清市氏注(1) 前掲書一五六頁。
- (10) 山田清市氏注(1) 前掲書一五六頁。
- (11) 山田清市氏注(1) 前掲書二七五―二七八頁。「わかおもふ人はありやなしやと」とは、表中にないが、本書中の記述から補った。

章段	武田本規定本文	國學院大學図書館本	静嘉堂文庫本
5	いけとえあはてかえりけり	いけとえあはて帰りけり	いけとえあはてかへりけり
5	いといたく心やみけり	いといたく心やみけり	いといたくこゝろやみけり
9	やつはしとはいひける	八はしとはいひける	やつはしとはいひける
9	すゝろなるめをみることゝ思ふ	すゝろなるめを見ることゝおもふ	すゝろなるめを見ることゝおもふ
9	わかおもふ人はありやなしやと	わかおもふ人はありやなしやと	わかおもふ人はありやなしやと
14	くりはらのあねはの松の	くりはらのあれは <small>な</small> の松の人ならば	くりはらのあれはの松の人ならば
16	人からは心うつくしう	人からは心うつくしう	人からは心うつくしう
16	ことに人にもにす	こと人にもにす	こと人にもにす
23	すきにけらしもいもみさるまに	すきにけらしもいもみさるまに	すきにけらしもいもみさるまに
23	たのまぬ物のこひつゝそぬる	たのまぬ物の恋つゝそぬる	たのまぬものゝこひつゝそぬる
24	ちきりたりけるを	契たりけるを	ちきりたりけるを
27	かのこさりけるおとこ	かのこさりける男	かのこさりけるおとこ
31	よしやくさはの	よしや草葉の	よしやくさはよ <small>の</small>

【別表】 武田本規定本文に対する、國學院大學図書館蔵本および静嘉堂文庫蔵本の対校表

(12) 対校にあたっては、國學院大學図書館蔵本は、國學院大學図書館デジタルライブラリー掲出の画像を、静嘉堂文庫蔵本

は山田清市氏編『伊勢物語（武田本）』（古典文庫 昭和四一年）をそれぞれ用いた。

(13) 山田清市氏注（1）前掲書一五八頁。

81	81	78	74	69	69	65	65	64	62	62	58	54	52	46	45	43	40
となむよみける	いたしきのしたに	さるにこの大将	かさなる山はへたてねと	女のねやもちかくありければ	女もはたあはしとも	このおとこは人のくにより	いとかなしきこと	昔おとこ女みそかに	年月ふれとまさりかほなみ	我をはしるやとて	あつまりきゐてありければおとこ	夢路をたとる	かさりちまきををこせたりける	あさましくえたいめんせて	ほたるたかうとひあかる	とかしこくめくみつかう	さこそいへいまた
となむよみける○ ^ハ	たいしきのしたに	さるにこの大将	かさなる山はへたてねと	女のねやもちかく在ければ	女もはたあはしとも	此男は人の國より	いと○ ^ト かなしき事	昔おとこ女	年月ふれとまさりかほなみ	われをはしるやとて	あつまりゐてありければ	夢ちをたとる	かさりちまきをゝこせたりける	あさましくえたいめむせて	ほたりたかうとひあかる	いとかしこくめくみつかう	さこそいへ□またをいやらす
となむよみける	たいしきのしたに	さるにこの大将	かさなる山はへたてねと	女のねやもちかくありければ	女もはたあはしとも	このおとこは人のくにより	いととかなしきこと	昔おとこ女	年月ふれとまさりかほなみ	われをはしるやとて	あつまりゐてありければ	ゆめ地をたとる	かさりちまきをゝこせたりける	あさましくえたいめんせて	ほたるたかうとひあかる	いとかしこくめくみつかう	さこそいへいまたをいやらす

123	115	112	111	107	107	101	96	96	90	87	87	87	87	86	83
かゝるうたをよみける	おきのゐみやこしま	いひちきれる女の	いにしへやありもやしけん	このあるしなる人	されとまたわかければ	よきさけありとうへにありける	さりければこの女のせうと	秋たつころをひに	さくら花けふこそかくもにほふらめ	わかすむかたにあまのたく火か	あまのいさりする火	いしのおもてにしらきぬの	ゑふのすけとも	うたをよみてやれりける	思ひいててきこえけり
かゝる哥をよみける	おきのゐて宮こしま	いひちきれる女の	いにしへやありもやしけむ	このあるしなる人	されとまたわかければ	よきさけありとうへにありける	さりければこの女のせうと	秋たつころをひに	さくら花けふこそかくもにほふとも	わかすむかたにあまのたく火か	あまのいさりする火	いしのおもてにしらきぬに	衛府のすけとも	哥をよみてやれりける	思出てきこえけり
かゝるうたをよみける	おきのゐて宮こしま	いひちきれる女の	いにしへや有りもやしけむ	このあるしなる人	されとまたわかければ	よきさけありとうへにありける	さりければこの女のせうと	秋たつころをひに	さくらはなけふこそかくもにほふらめ	わかすむかたにあまのたく火か	あまのいさりする火	いしのおもてにしらきぬに	ゑふのすけとも	うたをよみてやれりける	思ひいてゝきこえけり

【付記】 本稿をなすにあたっては、國學院大學図書館に御配慮いただきました。記して御礼申し上げます。